日本百將傳一夕話

七

へ13
3566
7

門 ヘ 13
號 3566
卷 7

早稲田大學図書館
昭和 34.6.3 受
藏書

日本百將傳一夕話 卷之七

東都

目録

○源義經
○上總廣常
○千葉常胤
○和田義盛
○梶原景時

以上五將目録終

松亭金水謹撰

義朝　左馬頭

九男　義経　源九郎
平治元年己卯生
母常盤

女　伊豆君門尉有綱妻

女　衣川ニテ義経指殺ス

乾氏
母南都衆徒勧修坊女　南都ニ住ス
子孫今猶在リ

源義経

人皇八十代後鳥羽帝文治五年討死ヲリ
今安政三辰迄　六百六十八年ニ成

源義経者頼朝秀弟也戰則勝之
攻則取之本朝古來無出其右者
可謂暗合孫呉壓倒韓白其事蹟
載在口碑

衣川ニ戮ひ彼を世ふ討死と披ぶ。辨慶以下四天王のうち亀井片岡
望月三郎三太郎春の所従で俱て蝦夷へ遁る。夷人尊崇して是で保護を。後
韃靼ハ到つて国王の婿とあるとの説あり。今奥蝦夷ハ義経大明神と崇とめ

源義經の話

なの公の智勇絲畧実ふ技柔に符う者あり。その本蹟諸書にあまたあり。天下挙てこれを称賛を張りのそく梅檀は二葉にしてその香勝るといこの公の為ふいくるべしいまだ襁褓の時ふ父義朝滅びのち母の懷に抱るまを所ふ隠れ呻吟こりしも竟ふ平家に捕られて朝敵の正統ふまたび孫児しかども一命を断るべきをありけれども清盛常盤の色香を愛て俳ひ乞ふ乞て待し只今若を殺ば寺に遣りて成人あらば後にあさんと其母次ふ若を八條院ふ牛若と乞て鞍馬寺に遣りて成人あらば後にあさんと其母の常盤を思ひ居るに元来聰明の性質ふまたび鞍馬ふ在て学問ふ一年十二の頃ふ及び倩思ふに父義朝のそもざる人ふ常て朝敵の名を負のこうびその身も殊ふ乞ども是全く朝家へ對して寇を構へしとあらば洋海一時の功ふ拙を人と人とも思はぬ挙動かの一家を滅して宿意を果さんと企ぞられしも。その孫計

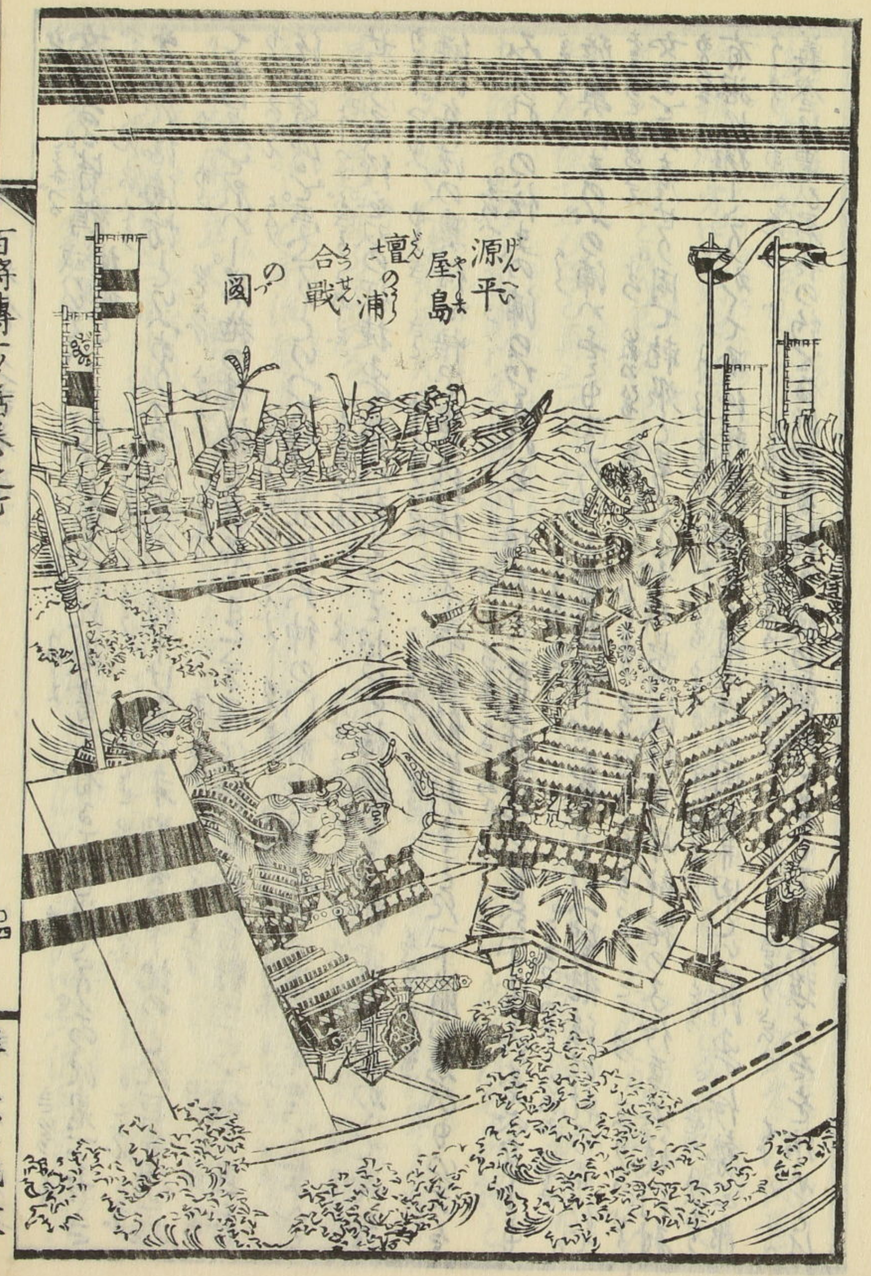
合期せば。天子六波羅へ行幸成て。國ら平氏の挙動天子を狩て暴行あり。人望に叛き天理ふ逆ふ争全く死を得んなれば吾族を挙て彼一家を滅しに朝の宸襟を休めん父の讎を報んとの天勝ふも思ひ紀しに夫より孝子精神を凝し。昼は一室ふ籠りて書籍に眼を晒し。夜は出て剣法を試む

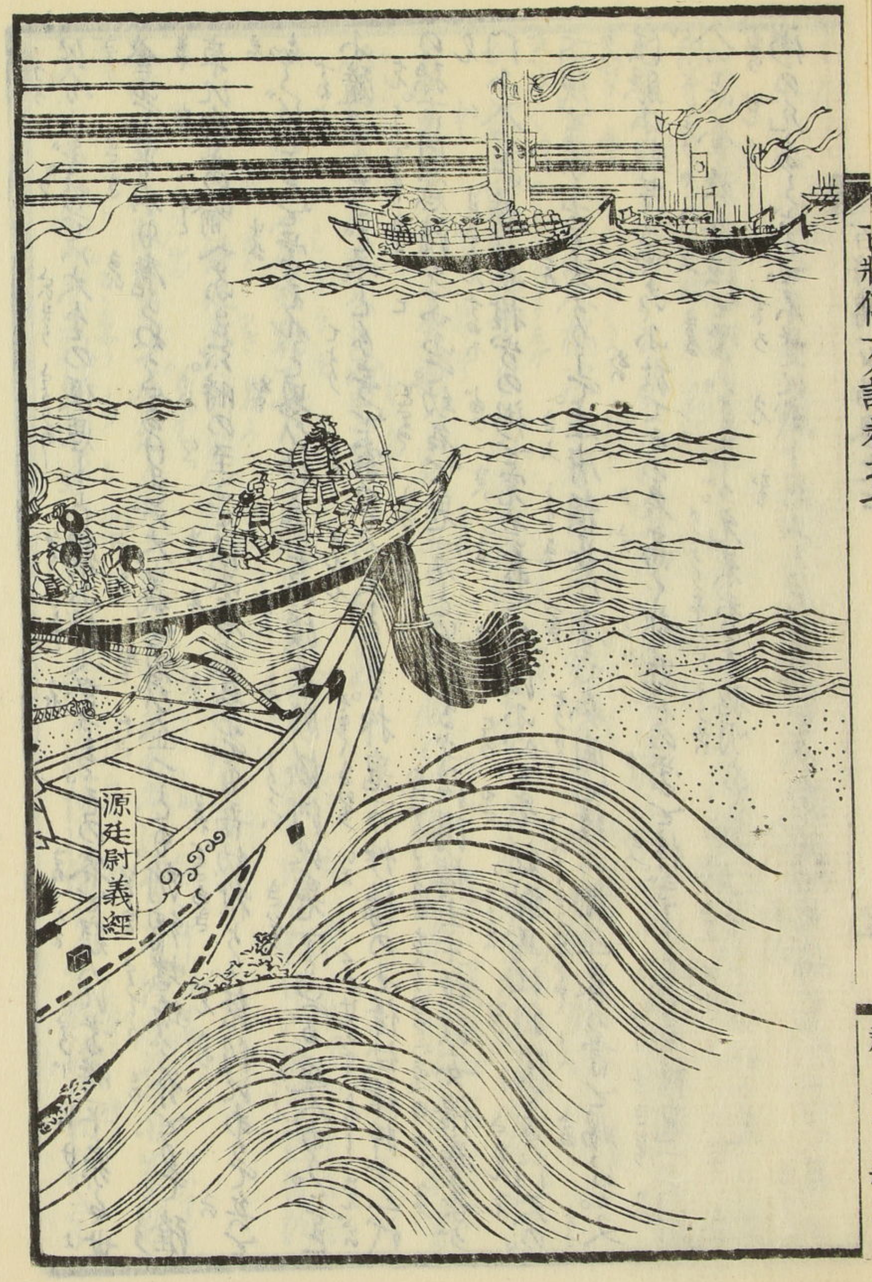
按るに牛若鞍馬にあり。後く僧正ヶ谷に出て天狗に剣法を学ぶ。その師を僧正坊といふ乞ども。這は例の俗説なり。この地を今僧正閑居するにより僧正ヶ谷と号く。こは附會しる妄誕なりとぞ

然るに母の常盤ヶ許より出家得度をすべしと度々ふ乞ども牛若左右ふ辞ひ遁て更に剃髮の意ふ。殊に源ふ位頼政死落にあり。折く鄙従として安否を訪ひ衣服を送り調度を賜ふ且渡辺黨の中播磨次郎者とのて出家の

く止まらず。年若くして心を固うし。出家を願ひてこの所に長くあり。あば悪うあんと
[illegible]禅林坊津師[illegible]を考へ使宣を窺ひけるに播磨次郎。頼政の内者を稟
附[illegible]遐那を尤と改む
てこれに来つる如此こそあるべしと云ふに従ひ兼安四年三月二日の暁天に鞍馬を立ち
出陸奥の金商人橘次季春に伴ひ栗田口まで出で一処縁て頼政より示せー
如く深柄陵助頼重なるの遠い頼政の一族なりてこれに年若が来ると候うち連ぐ
ちて奥及へ下つる秀衡が家を主とせ秀衡い清衡が孫なり八幡太郎義家
以来奮好の家なれば崇敬して止めおきぬ
附ての年若鞍馬を出で十日尾張に到る国て熱田大宮司内西頼
範忠が許に若て首服を加へ源九郎義経と号る
その次の年改元あつて安元となりけるが其年の冬に義経既に十七歳熟
男に秀衡が崇敬に同て身い安けもとどかる遠境に潜まりて花洛の動静さ

に分こそ。紛ていと大全の便悪し。と竊に都へ登りて。その容を窺へに当時平家の世
盛にて草木も靡かぬこなりければ。大義を思ひ企つとも。所詮蟷螂が斧をもて隆
車に向ふの喩へあるべし。時の至るを候ふ若ば然にても吾幼稚より。梵利にありて兵を
知らんと。とて学だんと思ひけるが。その頃東師堀河に鬼一といふる達人ありと。
ふ聞従ぬきさだめと。ふ考へ索めて門人となる。抑鬼一は伊勢の国係伏律師が三代
の孫吉岡憲清が子にて。幼名を鬼一丸とのびけるが。陰陽博士主殿頭安倍泰長が
門に入りて。暦算推歩の術を究め兼て兵法に心を委ね。鞍馬に行て天門天の。
示現を蒙ふりて夫より。左府頼長に属て奏聞を経て。鞍馬の書を賜ふと。又
法眼に叙せらるる。ふ於てその名高く都鄙その学を仰ぎ。義経鬼一が門に
入りて。昼夜兵法を学だまーが。元来秀才聡明なれば一を知て十を知る鬼一も其
術の凡あらざるを。不覚に感ず思ふとぞ。[illegible]その法を皆傳せず。とて鬼一が


源平屋島壇の浦合戰の圖


源廷尉義經

女児なる皆鶴継娘とかたらひて終に彼書を看ることを得たり。されバ鬼一が亡き
弟子に湛海坊といふありけるが北白川に住しけるが一年出雲の目代と見え巨萬を抛
てその名を殊ハし。岩抛の湛海と異名さるる悪法師義経皆鶴が事を嫉み因兵
法の皆伝を受たりといふを憤りて五條天神の門前に濫者を語催し義経を撃んと
せしが義経無双の捷速に衆人敵することを能ず湛海も遂に斬害せらる。かくて義経
縦に兵法の奥儀を悟り奥州へ帰らんとて皆鶴に別るるに「下萌の思ひもいはまる
みちのくの信夫の浦のなつかれをしほ太」と一首の歌を送りけれバ「よしさらばあるべくとも
陸奥に志のぶの浦ハそこ由まうど」と皆鶴返しせしといへ皆鶴後に乾乃前にて
女子を出産せり。因て乾姫と号くとぞ。成長の後伊豆守仲綱の子伊豆右衛門尉
有綱に嫁したり。かくて義経陸奥へ帰りける道上野の国松井田といふ所にて伊勢三郎
義盛に遭ひ君臣の約をなさん折義経主従の盟約を立ることハ木旗大吉を始めとし。

後に御厩喜三太といふ次ハ金商橘次なり後に堀弥太郎景光といふ第三ハ武蔵
坊弁慶第四ハ則伊勢三郎なり是より後徳を慕ひ智に愛て臣とするもの挙て
算ふべからずとなん然るに治承四年秋八月頼朝義兵を挙ると聞て往て力を助んとし
秀衡諫て止むること再三に及ぶといへども義経兄を想ふの情切なるに因て竟に可
を陸奥を出て黄瀬川に兄頼朝に会しける頼朝大に歓びて平氏を討するの将と
なせり。かくて後元暦元年義仲平氏を攻て京師を逐下しその身征夷将軍となり。
威勢肩を並ぶるものなく心驕りて君を悩し乱妨をなせしにより頼朝弟範頼と
義経を将として宇治勢多より向はしむ義経奇策深慮を竭して竟に義仲を粟津
に伐ち軍を卒て　帝闕を護り秋毫も犯すことなし君臣上下大に悦ぶ曾て平氏
ハ室山に拠り且一谷に城を構へ再び兵勢を揮んとす頼朝また範頼及義経をして
ねとす。平家を伐しむるに及び鵯越の坂落し風波を憚らず比土へ渡ることを留ハ

人意の表に出て、よりや大公望諸葛亮再びこの世に出るとも、極めて克一がごとの
功あり。平家思ひの外に責立られて、讃岐屋島に引退きて更に防ぎ奉りし
に、屋島の内裏と称するに成り。紅葉を海に漂ひ、長門壇の浦にて、前帝及び
二位尾平族盡く海に没し、玉璽神鏡の二種を奉じ、都へ還し納め奉る。建礼門
院を始め奉り、平宗盛その餘の虜数人を曳て、孫会小敏陳に結ぶに、頼朝梶原
が、絶を信じて府に入れ、腰越より逐かへさる。恐河法皇は虜なる因義経流落より、妻に
右命によって義経を殺にうち滅し、尋でその身も誅戮せ、大功あつて罪なしも、絶者の為に黙け
せ給ふ。その禁囚の横朝の條に、今ふたたび累せり。
らるゝ。古今にその例なしとせば、義経勇略衆に超て、智量抜群なりとゝへども。
その薄命なる歎べし

評して曰く。能戦ふものゝ上刑に依ん。と、将に義経ごとせんか且世俗
の流わも。よく游ぐ者は溺る。よく騎る者は墮とゝへるも、将にこのごとせんか。

ゝふとゝに武勇絶衆時変に應じて、ときとして女子と風の木の葉を捲ごとく
実によく戦ふものなり。故に況て勝に乗じ、威勢に擁て至尊を害に及に皇
天の幸を招て功あるとも賞せらるべき涯蒲魏の人となる。長上刑に依る
ものなり。後の後世その玄味の門ゞけるべ賛言せば。但しこのごとく東國先生。
詳に辨じて国史累に細書を加ふる左の如し

従六位下河内介西尾言忠松苗之弟也嘗論 帝崩西海之事曰我邦
古來向闕弯弓者稱曰朝敵即逆賊之謂也凡為朝敵者未
曾有全其終者也當時源氏西討雖假名於王師其實私戰耳非為
朝廷也要之平氏有罪則可代有讎則可復唯此 安徳天皇雖謂故
相國平公之外孫身擁三器位居萬乘儼然我臣民之主也豈可向 帝
舟発一矢乎先是一谷八嶋之戦平氏族屬殆盡及逃壇浦諸將士存者

無幾其亡可計日待也方是時義経宜命軍士不用急擊千思百計奉
迎天皇而後討平氏殲之縱使上皇詔義経有前帝亦可害之言至
尊不可害焉若强詔之則身宜死之至尊遂不可害焉況上皇命西
討非與前帝之事而義経不學無術不思此義唯以奮擊爲快遂
逼帝没海而不知身爲朝敵或曰抱帝没海二位禪尼誤之咎不
在義経也余曰否是時東軍急擊連射帝舟與手双戟之僅一間耳
帝將没海驚嘆曰何往唯此一驚一語遺恨滿天地讀宋史至八歲幼
主没海以其慘同帝雖爲異邦之事悽然涙下況我皇國臣民志
忠義者讀此條孰不感傷悲泣孰不恨義経不盡心力邪ゝゝとゝえ
ゝり文長けまび要と摘のこ

忠常 千葉 前上總介
高望王六代の孫
常將 小次郎 千葉介
母常陸介正度女
六代 廣常 上總介八郎
良常 八郎
定常 上總介
秀胤 上總權介

上總廣常

人皇八十代安德帝壽永二年伏誅 今安政三辰迄 六百七十三年成

上總廣常者關東之良族也賴朝
杉山敗衂之後廣常率兵二萬來
歸焉其功最多既而賴朝殺之而
後有悔

按るに廣常智畧あるび忠義ありしとの人ども。不學ゆえ身の怯むべきを知
らぜ。戰功小續つて人小驕つて曾て君上を蔑ゆ。こゝ小於て強者の長談小
罹つて且君の孤絶を溺て其身を亡ふ小到は。後の人ゝこゝを陷むべ―

上總廣常の話

去ぬる後一條帝の御時長元四年繰叛を起し源頼信朝臣追討使として脱に繰ふ伏しける平忠常のみなり。その時諸共に繰せうはべきと毎へ常隆父正度が女そこの繰叛の在さるを怪うぬとに思ひその妻人の亡を窺ひ擇兒をうきて抱きて常隆なる父が許へ這くに逃伴まりかくて正度この役に官軍に加はこびくの戦功ある因て頼信の寛宥れ沙汰とそ。あらず頼信を遣らはければ依を死事ふ成長なり。千葉介常将と呼ばれ丈より六代を経て上総権介廣常豪族の雄なりとそ。その威を東国に輝うもそ。ふ頼朝卿義兵を挙て目代兼隆を山木に伐て来始よりと歓びもの大庭俣野が大軍に聞まを所方一二と憑こうる笑四五一義忠も敢なく討死しうしより忽地に敗軍となり従弟に方に義礼して土肥の椙山に入るときに主従僅七騎となり平家の為に網裏の魚籠中の鳥となるも。

天洪福を除さまて梶原景時に依らまを幸くてこと安小弟に捧して安房の国笑鶴が浦へ到らまつ捕安清の男ひいきを東国の軍勢到らば。その勢ひ微くるに依るを頼朝小山田別朝政下河辺庄司行平等を始梶守清元菖西三郎清重等に早く糸令をべきのよう御書を賜はけまば各異をはと思清ハいこうるを左右なくい書を集りぞさて今日平北那より。まづ梶原廣常が方へ波あるべしと強せうまけるに黄昏に及ぶとして武民屋に入て止宿なりのひけるに妻の従人長狭六郎常伴とのへるの平家に志深をけまば如此のよう吾等取て勲功の賞不無うんと密ふ勢を引率うちぬうしてせ所ふ三浦義澄のこと早くも安智を此方より逆賞に是を長狭常伴ハ不意を撃を暫く防ぎ戦へども。三浦が猛勢に敵ーがく。竟ふ敗北して逃走をう。かくて出供ふ佑ひける安西景益まうしてのそく常伴左右なく逐電せんど狂その類ひの者多かうん廣常が弟へ波らせ

の人いのと先ふくれべ。若ど四使を遣つかまつ。近ひに糸向まべきよう。命ぜうまつる。
とヤけまべ各この議むと。和田太郎義盛と廣常が方に藤九郎盛長と千葉次
常胤が方に遣はさまとりけるふ。廣常義盛に對面して。白旨を素つ。千葉次郎はまりし
後じ。糸上仕るべしと答てり。また常胤は四使を招。源家再興の旨頼と素つり。心中
大ふ悦て。婿ゑと姫め。嫡孫まで一人も残らびり引俱し。下総の國府に糸舎を頼
朝大ふ歓びの人。然るに權奴廣常いめまぐ糸らび。渠は一族所從も多し。一廩の味方
あるうんと思ーめふ遲糸の糸。りゑる所存也と。所詮も多し。廣常は千葉次郎。たや
下総まで立帰ーとの人て。先て周東周西伊南伊北廳南廳北の輩を徳催ー。共勢
数合二万餘騎。治承四年九月十九日。隅田川の邊に於て。頼朝の陣に糸る廣常
が心ゑ。頼朝義兵を挙ゑて石橋山に敗軍ゑー。安房に渡て。義国まで城の人ども
今の世は平相ふ清盛の管領あるべざ所也なく。ときう志ある者も後難を懼まて。

糸らびのまぐ先勢に在しまるまべ。定めて歓びのあらんと。心中に綾を常胤に附て。糸上
のよーと言ーけまべ。頼朝大ふ不興也。渠は曩祖頼信朝臣より。世く源家の恩を
稟く。さまべ其上。先ーと。早速ふ池糸びべきを。彼の如く遲糸の条吾を侮はにこそ
あるめ。因て對面に能はざまべ。也に本所に帰るとも。心のまに為べきこと。案の外
なるまべ。廣常大に怒ー。且天晴大将の器体をうひねと感服ゑー。常胤を
りて稚くふ出信礼と言ーけまべ。頼朝也猶心解て。於て廣常に對面ーの人。本朝通紀
と按るに云く。或云頼朝以所持之扇。敲廣常意
計頼朝敗軍餘衆未足計。若無將
主之行。忽變害心降頼朝。於是頼朝漸震威於東州。と云えり。扇を以て面を
敲りとの人。説いのごゑ。さてのるい右まる左まれ。東西の豪族廣常が屬從人
と。先に及びりまくと池糸るに市に伴まるが如くあまべ。頼朝忽にその威を震

群玉堂新板

群玉堂新板

とより藻会に入るの人と。偏に廣常が功を拠りとして重くこれを用ゐ給へり。
然るに廣常功を誇り。驕り光侈のこともあり。これを妬む族その虚を窺
て頼朝に密告をなすべし。元来孤家深き君なるべし。是を疑て常中に居
勇士を伏せさせ是を殊せり。後に実なることを知て頼朝大に悔るとなり
按るに頼朝廣常を殊るの日。後にその事の虚なることを悔るとなり
又云。但し殊せられる年月闕て詳ならず。傳聞に廣常
特功驕恣漸頼朝被疏薄後命梶原景時圖之子良常称小権介父
子並為景時所殺。頼朝後知其寃とあるこれを功臣を嫉む例の景時
が所為なべし
初め廣常大軍を率て頼朝に従はんとせしより東及悉く靡き。終に府を藻会に
開きのこと。偏に廣常が功なりとす。こゝに於て驕過恣逸く。股肱の臣のこゝに列

七統中治承四年十月頼朝常陸征伐の条に数の勢ひ強大なり。鼎従を中に
満々たるべし。計策とりて殊罰あるべしとて常胤廣常義政清実平を除の宿老
群議なり。廣常縁者なるとの事を計らひに太郎義政は参じべきとまうす。
矛の冠者秀義は父に郎隆義も脱に平家の方にありとて左右なく従ざる
金砂城に楯籠はかりて太郎義政は廣常が誘引に因て大矢橋の中央に至る。
この時家人等ことを退しめ義政ことを殊しとう夫より秀義を攻討んと軍勢金
砂城に向ふ所この城要害堅固にして輙く攻拔ことなし。秀義大に敗北に
於て楯籠廣常一の計策を巡らして秀義が叔父佐竹蒔人が智謀人に勝ることを
ど欲心ありて世に報ゆるとて廣常をきこと向ひ蒔人に対面をして東国の親族
ことに佐殿に属く然るに秀義我を滅ことを張て足下骨肉なり
とのへどの逆に堂に順を整ひ天道に班るあり。早く秀義を殊し遺族を領知しのへん

と勿論あり若遅くあさび忽地に禍ひその身に及だんと言を巧に弘一けるに荒人迷ふ能堂一城の後ふ廻りて用を奏し秀吉義防ぎ難きを知て城を棄て逃亡し奥及花園の城ふ落ち廣常一計ふ金砂城を屠て其功を彰せり同十二月頼朝卿新邸の竣に出移従りの。その管作の間擁必廣常が宅に在しり。かく出類切あや後を けん養和元年六月十九日佐殿網孫の出慰ことて二浦ふ渡所あくせの人時廣常嫌て命を受け郎従五十餘人を率て佐賀屋の濱に参会し佐て出駕の人数と斉一郎従いとふ馬より下て道の傍に拜伏す時に廣常い馬ふ騎あぐく出禮を致すの間二浦十郎義連い出駕の前に在けるが急ぎ下馬あるべしとのふ廣常敢て受入ざる私と二代の宿老の後るし。終に馬より下ざりけるど何と命せ安さ侍るとのの。この時二浦義澄い腕伏と奉ず蓋を進め上下沈癖の興を備へんとふ固辞出郎義実 [illegible] 水干を所望まうしふ佐殿刎賜をく着き

べきよう仕命あり義実面目身に餘ることを思用あり けるに廣常のて是を嫌ふ義実ふ対ひそりやう。固様の美服い廣常あどこそ拜領ものを用ゆ五ぬ足下当に恥分ふ過うと悪言を吐ければ義実怒も大ふ怒を汝廣常の所為功に誇ずそ他と程んぞ。この義実が最初の功ふ維ら及ぶりのあらんや。と夫より双方言募ず恐置者く少えけるど君に伺とも命せるまび時に二浦十郎義連義実を佐と白服今日君この亭へ渡らせのひ義澄興をほくに処のあるべ門前をも憚らび尾籠ある挙動ふ所存あらば後日を期せべ。但し老後の物狂ひあや。廣常もまさ狂ふ。と制しけるば夫ふ依て双方言葉を止めにり義連ら挙動神妙あり と孫更御威めりとも鉞をども拝廣常て棄のいぬあや寿永元年八月十二日為の別。御憂所出産の節も上総介廣常い墓月の役て勧めり。この時その子小権介良常出産平安の出使として上総の一宮へ遣いさる。この若君い頼家卿へかくて

五夜の後い廣常沙汰せり。かく弱幸て夢るとおもへども。その身を顧るとあくいよく弱し殆まうべ終小魂者の舌既にかを命を要ふと遺憾あらむや。後の見る者この理を思ひあるべしと

按るに白居易が太行路の詩に云く。近代君臣亦如此君不見左納言右納史朝承恩暮賜死行路難不在水不在山只在人情反覆間と実に日古今の確云あるべし。古来今世和漢とも此君の弱小殆を身を滅し身を以て等ふべし。繁きが故にとゝ思ひ省く。

桓武天皇三代
高見王 男高望王六代ノ孫
平忠常 千葉前上總介
忠將 中務太郎
常將 從五位下 千葉介
常長 上總四郎太夫
常兼 從五位下 千葉大夫
常家 上總坂太郎
常重 從五位下 千葉介
常安 白井六郎
常胤 千葉介
母平政幹女
日胤 國敬寺律師
胤正 千葉介
母秩父重弘女

千葉常胤

入皇八十三代土御門帝正治元年三月卒
今安政三辰迄 六百五十八年ニ成

千葉常胤者柳營之老臣士林之甲族也鎌倉草創之時頼朝依恃之如父母西海東奥戰功籍甚

武家綜林に按るに。治承四年九月十七日。佐殿下絶小向八ーの人常胤嫡子大郎胤正次郎相馬師常三郎武石胤成四郎大須賀胤信五郎国分胤道六郎大夫東胤頼等を率て下総の国府也に来舎の時佐殿常胤を座右小招の已須く用馬を以て父と子共也を作らるゝ。是前文之に依恃まると。父母のゝ一とあるを敬へも

千葉常胤の話

系図に著さざる。桓武の皇孫にして世々下総の千葉に住し、地の名を以て氏とし、さるに因て一族廣く最冥衆の剛勇なり。頼義以来源家の諸將東国を統るゝ及び千葉由まさの麾下に屬し、祖忠勤あつて志を傾けゝり。こゝに源頼朝公、蛭が小島の流人となりて、数年の星霜を送るのひ既に時至つて義兵を挙げ、代々山木兼隆を誅し、滅しゝ人とのへど大庭候野が大軍に敗を終に敗を取て主従七騎土肥の椙山に身を忍び、辛じて芙蓉が崎より便船して安房に渡り、嫌て源家に志の深かりける上流の廣常が方に渡りあらんと一民屋に宿しゝ人。

常下長綱六郎常休のことを伝て急ぎ参せ対奉つゝんと綱しけるに三浦義澄早くも聞り。遅参して対面と祖廣常が偽ふ申載こゝり。かくて安西景益が里人の辻きもの程に恢へば則藤九郎盛長をして常胤が方に遣さる時ふこと治承四年九月九日のことなりし。今日は重陽の老。菓の宴の節含あり。初て貴きも賤きも、身の程くに祝詞を敬し、菓酒を酌て齢ひを延る寿をもあらん日なり。唐土の賛長房が言葉によりてきゝ登る茱萸を髻に懸て杯酒を飲む和漢に祝ぎる日なりとのへども頼朝公の安元。まだ定まらぬとのて是等の礼を行ひ難き集含てい後のことを如何せんと待ぎる他なし。かゝる折ゝ藤九郎盛長千葉より帰り来りて、そゝく在下命を奉つて千葉妙が門に到て要用をとゝせ処執次の近侍廣胤に伺ふ縁て常胤もあ坐に在て一族所従も控へゝり。かくて作の辻きを逆くに演る新常胤ハ、眠まる夫似て更にことを改ざる如し。在下不審存ぜるゝ打ゝ嫡子千葉大郎胤正二男二郎相馬師胤言葉を決へて申さゝり。依厳虎一才の亦を興し、猿喉を絞めの人最初にまづ麦家を召て鷲掴を志をのへぞ。さもとば是ふ服應せんと。何ぞ遅くしてかゝるべき。速ふ四言葉をのへとまをし

千葉次郎成胤
太郎さ西
三郎さ成
五郎さ久
六郎胤さ

頼朝卿
使を立て
千葉常胤
父子と招ん
ざむ
小太郎成さ
五郎盛長

けるとぶ者亂この時服を改めき一生を見まつり莞爾と笑こを遥こるを上古い初らんび。
經基源姓を揚ゆるをとり。源平西家君を守護し。互ふ暴逆のてあるときの。彼を
征して此ふ撫る。一旦故左典厩孤威を汲て東及ふ揮いまつ中由なき信頼ゞ暴
ふ共いて四一門滅びのひ遺遺をの人中或ひい流さを名を惜こ有ど中更ひを
びゆく。平家頻つふ繁昌して二十餘年の春秋を送を。一門高位を官ふ昇り且
天子の四外戚として萬機を掌の中に握ふ在下多先君の為にいて是を愧と
ゝども。如何ともをべきをうなく空く紅涙に沈むの所佐殿のくを義兵を挙げ。
のふとゝ攻めのゝ。で一戦ふ敗しのひ四位方宣うゝんび。と世の風波かくをまく。
如のにありぬきのひけん。とその音伝を候ふ打しを。右の四位に頼る条何ゆゝ之
ふ差んをぎ一族鼎従を引倶し沈来ゞいべ。源家中絶を興さを世の感涙眼
に遮ふ。と勇こ歓びてをとりて林酒を出し。猶程くに続ぎる折ゝ書時の四

在所を義ふ。ふさせる要害の地にあゝび。まこ是四曩跡ふ中あゝぶ速に御坐
を移さを相及孫会に入ての人彼処い地の利他ふ勝つて大業を創めのゝふ歳
竟の新ゆり。在下不日ふ御迎の為糸向をべきのゝ是く中言いと述けをぞ。
佐殿を始ゝ。金歓びの眉を開ゆり。かくて幸亂一族を集め脱に打立んとしける
ときに東六鼎大夫亂頼父ふ対ひて言をまう。我を四代い元来平家の従ゝ。
今書家境を離を佐殿へ参るを。浅ゞ忽ち吾て討留ん。と寛然を出すべ
し。さすをび彼ひ林檎の程より発つを雖ゝ先達てまゞ渠を責殺ん
ふ。と使て幸亂頼を副て鼎従ゆ。二百餘騎をさゝ向ける亂頼勇こを馬を就世四代の絆ふ有
ゆ世是い千葉奴幸亂ゞ六男東六鼎亂頼及嫡のふを鼎成亂之遠田右兵衛
佐頼朝卿院宣を蒙ゆりの吾く中名ふ依て彼四陣へ参るゆり宣てを許ふ中

同志なる人く同道せん為に来りしと。と高らかに述けしに。目代笑て矢会に登て。
遠い奇怪なることを好むるか吾君と仰ぐ所い。奉くも桓武の素裔官い太政大
臣ふ至て。今上帝の外祖父なり。爭で頼朝等と斜しうん。年齢僅に二十餘年。
恩澤と被ふりあるべく。忽地怨敵の男ひとを孝条奇怪なりと。罵るべき。
命亂類をあるべく矢一筋。弟うせんとのまに。三人張ふ十三束切て放てば目
代い矛を反けうけもど侍ある命従ぶ。胸板を射貫もて。走逆に撞と落もて。
目代い膳を冷ー二言とものそべ矢会を下るを。勢に下知て侍ある所。打節多勢
なりけるべ。亂類ば少勢懼れに臣ぞ。と門をうち固め。差結を張て敵に射る。
う海の亂類放亂も。味方い僅に二百餘騎。敵い千騎に餘るのこと。城中を防ぐなと
べ。初てあるべく力及ぶ。時剣を抜き。四方ふ。まと接兵も来るべ。と佑と沈吟て心
利る。長に命じて大を掛とべ。折ー北風烈しくて。矢十方に飛散て。忽地彼に接

られより目代ともと防んと右往左往に渋めく間ふ亂類放亂勢を進め。経み
く城内ふ雪入て。終に目代を殊ーなりとふ判官代親政い同五千田の荘け領
家なり。右刑部卿忠盛朝臣の聟あるにより平家ふ親ー。さるべ。と。
仕ふ多勢を引率ー。い目代が為と救ひ。い亂人子を討て勲功にあさぎぬと
操に操で弛束る。ふ太郎成亂を智。右ある藪茨に兵を伏せ静まりかへつて在ける
が。親政いかくとも知べく目代が矛の先のをとりて。全三者に蒐さする成亂いとき
程に敵を遠望て時分いよ。と暴ふ関を作とうけ。仕と叫て蒐出べ。思ひのうれ
親政勢。後き周章て隊伍を乱る所を得うや應。とうち囲を責戦ふ親政自
分太刀振翳ー。雲時い丈えうけもど。勇を切る千葉勢が。猛威失して。走つを雑く。
卿麻を加へりて。勝む所とふ太郎成亂。弛侍て生捕り。ふ放て。この軍忽地落居ー
うしべ。同十七日勢揃して佐殿へ参らんとに。為るに。この日頼朝卿も。亂が来ると侍と。

下総の國小八のへ。端あく。次にて。佐あひ。奉は。千葉の介は。一番に。常胤。次小。
千葉太郎胤正。二男。次郎相馬師常。三男。三郎武石胤成。四男。四郎大須賀
胤信。五男。六郎東國分胤道。六男。六郎大夫東胤頼。孫小太郎胤成。系圖と按ずるに太郎
と先とて宗徒の従兵。百餘騎。下総の國府にて。謁し奉り。則今度生捕所の判官代
親政を。獻じ。且自代て。討る。赴き。且小濱城に奉つる。頼朝深く歓びのひまず。常胤を座
右に徴し。足下ゲ。誠忠。誠にても。智。もの。れ。幽囚の身に在あら。忝く。且。隙宜て。揚り。不日に
兵を発し。とのへど。微力にて。本意を。達せず。忽。拉浪客とあらんと。欲ると。看功を。忘
ぜやと。一族を。率て。来奔の。条。何事。ぞ。是に。若し。須らく。司馬を。以て。父とする。れよ。作らる
按ずるに司馬は。諸國の。受領。大少掾の。唐名なり。必の。唐名。長吏とのひまず。別かると
の。常胤。千葉。次。郎。唐名。司馬。にあるべ。く。然。ど。諸。本。に。司馬。と。元。こ。り
常胤感涙肝に。銘じ。拜謝して。仕けるが。頼て。常胤。座を。立て。一人の。弱冠を。伴ひ。来つ。この

人。を。以て。今日の。御贈物と。思さ。べ。是。いと。陸奥六郎。義隆が。男。にて。毛利冠者。頼隆
なり。と。言。ふ。より。紀の。へ。紺村濃の。直垂を。着。小具足を。加へ。て。常胤が。傍に。坐せ
依殿。を。て。徳の。へ。也。是。如何。ぞ。と。問。へ。ば。義隆。の。若。申。知。ば。為。義。の。末。孫。なり。
平治の時。父。義朝。君。と。都。を。落。ず。華。城。に。かつ。ま。ふ。大。衆。の。流。也。矢。中。に。の。ふ。
因て。義朝。その。首。を。討。湖。水。に。沉。め。の。ち。とも。ん。義。下。この。君。を。也。ていまだ。澎。く。五十日。
さ。ど。日。男。子。なる。に。因て。下。総。に。流。さ。ま。の。ふ。て。常。胤。密。に。扶。持。し。奉。る。也。二十二。年。に。なり
の。へ。利。源。氏。の。胤。子。と。言。ば。頼。朝。大。ふ。敵。び。ま。て。千。葉。ゆ。が。上。座。に。殺。ひ。の。ひ。常
胤。が。誠。忠。ま。ま。く。感。ど。の。へ。と。い。へ。ま。ま。より。後。頼。朝。卿。孫。舎。へ。ま。の。へ。及。び。父。子。昆
弟。忠。て。現。し。元暦。元年。木曽。追。討。の。ま。き。大。将。軍。頼。の。隊。小。従。ひ。尋。で。平。家。を。攻
なるの。時。也。生。田。に。向。へ。八。洲。に。赴。き。忠。戦。軍。功。比。類。な。し。因。て。ま。く。用。ら。も。孫。舎。才。一。の
者。に。ま。り。。。かく。て。後。文。治。元。年。頼。朝。奥。及。逆。討。の。日。沙。汰。あ。り。。這。い。奉。仕。と。て

なりの。ゆく軍議定まりて。同七月八日常胤より。新羽の旗を献ず。其長六尺の絵物あり。上の方に伊勢太神宮八幡大菩薩の神號を記し下に山鳥の羽相對せり。そもそも古老勇士とのたまひ。多きが中に千葉氏常胤にこの儀を作らしめ。去治承兵乱の秋常胤一族を従へて出陳へ来りそもそも以へ発向あり。所と合戦あつて紀伯の宿に返留ありしとき常胤八海道の大将軍として。八田太郎朝家と同く出陳ふ来はそもそもより軍功比類なし。この役頓ふ平定して。緒氏系累を唱へ。遠久元年十月二日幕府上洛の時。先陳畠山重忠後陳八千葉次常胤なり。同十一月七日入洛あり。法皇思ひて叡慮ある前後の従兵華やかなる上に後陳常胤一族所従今日と晴と綺羅を飾り。在京実に縁会の光栄やと見物の貴賤上下おのく感ずるとあり

三浦大介義明
一男
平義宗　杉本太郎

義盛　左兵衛尉
常盛　新左衛尉
義氏　和田二郎
義秀　朝夷三郎　傳ふ云母八巴女
義直　金窪四郎　左兵衛尉
義重　和田五郎兵衛尉
義信　和田六郎兵衛尉
秀盛　和田七郎
義國　和田八郎

和田義盛

人皇八十四代順德帝建保元年五月伏誅。今安政三辰迄六百四十四年〻成

軍功司武士衛

和田義盛者屬頼朝麾下往〻有

朝通紀と按るに建保の乱義盛族滅の条にのゝ。義盛屬志於頼朝以往。東州處々困阨相隨不顧其躬。南州西海之役戰功不少。由是頼朝使義盛司士衛軍政。賜賞甚厚矣。是頼朝報義盛之勲功不浅浅然義盛不知臣子之可守之所。狹舊功任思隨情恣上訴。以不任其望之故。怏々遂逆計。却禍其躬。赤族矣。古語小人有非常之功不幸也。吁吁信哉と。えうり盛とのたまへり。この巻北條氏ゲ新ふ也〻

和田義盛の話

頼朝義兵を揚げしとき。微小因て三浦の人々治承四年八月廿二日。三浦次郎義澄と始とし。和田太郎義盛以下数輩の精兵相模国三浦に発して依殿へ来れとに然るに九月河洪水にて左右なく渡りがたけれども駕を駆て河に入る。義澄軍して落のびんとせるに。今い給方なくて引返に。このとき由井の浜を過て富山次郎重忠ゆきあひ囲てこれを挑て戦ひ重忠が郎従五十余騎。射たをしけれども力なく。重忠い武義に伴り三浦の勢中へ引入り。重忠敵なく三浦黨に負べきかあらねど。上総権介廣常が弟金田小大夫頼次が七千餘騎少を加へ三浦が兵威を扶け敗なり。重忠熟ありしやう。父重能叔父有重京洛ゆかりて相国の恩を被ふ。その子として。是をこそに見るさえい忠にあらず。且い先日由井が浜の恥辱をも雪んと。来るに名ある人々。河越太郎重頼。江戸太郎重長。葛西三郎清重。稲毛三郎重成。榛谷四郎重

朝。金子十郎家忠等を始とし。其勢三千餘騎を率て衣笠の城へ押寄う。三浦の人々是を受て。いざ防戦の用備せよとそ。くの孫配なり。和田太郎義盛い西の木戸とで獲りける。寄手猛威を揮ひ。関を揚て責寄る。三浦の面々こそ先途と防ぎ戦ふと雖ども。軍卒等矢種を失ひ力竭てその夜半。抜くに落うせて残兵幾干もあらざりけるかくて。い奈何ふかりしとも防禦ひがたうんと。緒ねる呆をる折うく三浦大助義明。その嫡子義澄ならび義盛以下一族。うち招て言すやう。敵ハさるかい大軍なるうへ軍兵暴に落うせて。汝等のうにかりしとも。たゞ此うへい防ぎがたけん。若し一まづこと宜き。分と全うして依殿の出陣を尋ね奉て。源家再興を計んかい。頓くその用意をなせ。夫明て怨敵の方に紀らば。翼なくして逃ぬ術なし。急ぎ汝らへとありけるかぞ。人々申実ふとあり。既にその准備をす。義明とも伴いんとも。大助頭と左右にうち揮りつゝ。源家累代の家人とて。その貴種再興の時ふ應じ。老後

の歎び何ぞ加へん。然れども吾八旬に除つて。身體疲れ所労。怪しむ。餘命の少ごもの限りあり。然るに僅生延んとして。汝等と倶に落ることを。半途にして敵に捕はれ情しき弱冠まで。こゝまで為に張らせん。さまで恩にあるを。義に背くあるべき。恥辱を重ぬるのこ吾いこの城に遺て潔く討死して。その恩を全うせんと。汝等おのゝ覚悟する事なく。一刻も早く落失よと。その所理あるべき。不得に老父を遺おきて。落んと忍ぶ。忍ぶ。種こいひ縣へ伴んとのけまべ。義明大に怒て。長絶後に時を待べ。苦心も水の泡とやあん。汝等も三浦の一族。所容ごとに城を落。まと吾ともに討死するも。その宜しきに隨ひて。君を救ん。その子になり。その名を曉らべ。婦女子に和一別をも惜まず時を失ふ。その心ゆえ君の大事を。救ん。とも覚束なし。猶法て左右をでゝ孫にあるべ。と思ひ切ていわどに。人を纏の袖を絞て。さべ命に従ん。と心あるべ。老父を遺一搦みより落失る。かくとも。まるで考みの大軍。今日こそと勇みたち。其夜の明るを待つけて。泥ことに。夢みまべ。城内に入て。敵を壁き。谷の勇威烈くして。防ぐに所あけまべ。城中の君こを落す。但し吾八八十九歳。老命の憑こをあけまべ。こに残て討死するぞ。吾と思ん人こ。考せ合せて首を把もと。大声に呼りけるを。麓下河越江戸の郎従近よて。討取り。後世義あるゝ義明壮年の一族。こて。君の為に城を落。其外は注つて。こに死に。勇士賢さべ。恵こ失いぞ。嗟この行雅なるかくて。三浦の人こは海渡に到て。舟にこり乗。安房に行て。清なる海上に於て北條父子時政義時長清義実近友七。四平等に行あひ々。互に歎び。潸連ゆ。大庭景親千騎を率て。三浦に攻来ること。義澄等

朝夷三郎
義秀
勇戰

朝夷三郎
義秀

波海の後ゆえ空しくそこ処で引返し義に佐殿へ土肥次郎真平が計ひにて義盛
より舟ゆえ安房国平北郡御後に着のよし。北條殿下三浦の人々各々ゆえ参り会し。
数日の誓念を一時ゆえ。とまより後の様にそもつに鎌倉せしほこの時和田太郎義盛
進み出て言ひけるは今君先きを遂げのひこゆえ各参会する条実に天運の冥はく。
時に参りし人々猶此の人在下る。身命を抱て君を守護し参らすべし。頼朝の御世治
まりて後侍所の別当あに補せらるべきゆえ前のよこと忘れ。と思ひ入て述けるとゆえ佐殿感
しをてこの職に容易ならざる所望とて草創の功第一なその望ゆえ任せ給へと述に内
所容あり。故ゆえ天下一統の後義盛この職ゆえ在けるなり。さるゆえ治承四年十二月十二日鎌
倉新造の御殿に被従の義あるゆえ和田小太郎義盛に最前に御所へ供
奉の面々参集後侍所十八間ゆえ二行に対坐ゆえ義盛別当なるゆえ其
中央に侍に著到せしゆえ。元より後ゆえ曽遇対面で平家を攻るに及び大将軍頼朝の

孫に属し忠戦を励むと。諸書ゆえ漏れなくゆえ省く。最大功あるにより建久元年頼
朝卿上洛あるゆえ右大将ゆえ任ぜらるゆえ御家人のうち有功の者。左右兵衛尉左右衛門
尉に補せらるべきゆえ勅命再三ゆえ及べとゆえ。
十人と中将ゆえ。和田小太郎義盛を左衛門尉に補せらるゆえ。是より尚文治
五年。奥州泰衡征伐のとき義盛出供なし同国河洲賀志山ゆえ戦ひ賊を殺とき。
城の大将西木戸国衡。うち負て城を逐電の。大実山を戦え大高宮に加つ出羽道
を逃るゆえ落んと志ゆえ義盛追付て様々くゆえ後を引せ。何方を行て落ゆくぞ。敵
の大将と見ゆえ。偏日ゆえ返せと。眼りけゆえ国衡ゆえ鑣を外し物をものゆえ十四束の。
矢を抜き弟と射出ゆえ義盛ゆえ受得ゆえ。と身を反けてこを外し。ゆえ矢をとけて兵
と射る国衡い初矢を射損じ。二の矢をうち使ゆえとする所に早くも和田が矢飛来り
て強の射向の袖を透し。腕ゆえ中つて立けるゆえ。所詮ゆえ一歩あて。所詮にゆえ矢を

引返し義盛やうの道に入べきと二の矢番へて追蒐る。この時いたく黄昏て物のさだ分ぬ
ばかり。間遥になりけるに。手延の淵処うしと定めなく。樂の音を心あてに嗜道を逐近
う。千時島山重忠が大軍とりて押けるわどに。終ふたの所在を失ひ心あらび義盛い
徐くと退きけり。麦下大串次郎国ら。国働ふ行逢そうき敵と見てけるに馬の
鼻を廻らし上。餐てかるべ国働いとう合んと思ひ。ーうど爲ふ義盛ふ射いまこる。
矢痛ゆう血い流て殊に痛こさえ法きあう。遮ふ若ドとかりひ馬に一鞍加へけるが。
この馬い高楠第一にて。奥及第一の名馬なり。平泉ある高山に日ふ之及が祇園り池
下らーて更に疲ぬ汗さえせざる法馬也。不言に重忠が大軍来りこの上悪く鞍
とあそこに後きて踊て出ー。思ひ彼方の深田ふ落こう国働駕き池出んと鞍後
とあのせけもど。泥障も浸るだろうあるべ得に馬の足自在あらび。躍て出んとする
毎にまく深く踏ぬるあぞ。如何ともすべきあうなー。大串いこと見て得こうと歓び

近寄て相懸てかて馬ゆり引かろー。大串と虞げて組ざりけの。国働義盛大串
ふ劣ぬべきふ申ぐもど。矢痛こて働ぬ絶ふ大串に組敷ぬ。念あう首と
討ぬこりかくて八月十日。頼朝船泊の宿に遠間ーの人畠山重忠出前に参ド。国
働が首と奉ふ頼朝深く感下のひ。才一の功として。厚く勸賞あくんとも義盛
こもと受かび推糸とまうすあり国働い義盛が矢に中ぬ。討ぬこるあそい全く重
忠が功にあらび。と気ぬと辞てまうしけるに。重忠笑て冷笑ひ在下が隙にて討こる
証拠いぬ。この首と持糸せり。足下いのある証拠を以てかくまうさるや所ー。と
徒ーと入べ在下い大高宮の田の畦也。国働に出会ゆうとも。彼が射向の袖二枚目
と徒し射中てひべど麦下足下が軍に隔らぬ。且黄昏のあれてその仕方と見失ふ。
郷ぬ彼が鎧の袖に。その跡ぬふ見べー。若この言ふ相違あらば重忠一人が高名ぬ
最国働ハ紅威の鎧と著ー黒毛の馬に騎ていとまうしけるに。頼朝その獲を敢

傍て見るに小江滅れて射向の袖二枚目に血を染う。かくて六義ガヤを奈其得ュ一ふきにあらず。但し重忠は国衡に対して両人が功とあまり。益重忠い家事に先ず立勝負を決しけるやどに国衡が其の先ず矢継を負ひて去りぬ。大串ガ子育て持来て與えにより重忠実検に入れ。是より後正治元年。頼朝卿薨ドの後。頼家箕裘を稟嗣て政道に懈る。美女を求め駿鞠を事とし。弦るうらに北條氏軍とのこの君晴れて政道に懈る。美女を求め駿鞠を事とし。弦るうらに北條氏君に換て権を執り威勢ますく熾なり。これに於て北條父子時政等時政や不良の心を生じ。在大将家を覆し天下を掌に握らんとす。然れども頼朝以来奮功の臣多ければ懇に事を仕出し初て禍ひその身に及ぶ。勝を嗜むとも更に益なし。漸に汁らんとす。

頼家ぶ暗愚れて安達が妻を奪ふあど悪業紹逆にとのべども。ことを法て諫むるとなく。開ぶ心の隨ままなれば。然るに頼家北條ぶ権を恣にするを憎み。かの一家を除代せんと密に近臣をして彈ひの人を尼出家より若らをしめ。是を僥倖として頼家を侍夏の修禪寺に蟄居させ。その妻子の妻子なる一萬君い比企能員ぶ女の腹にして。かの彼に書ひけるを軍兵を発して攻。この母子を始めとして比企の一族を滅ぶ。かくて十二歳にあり。の人頼家の弟千幡君を擁立して二代の将軍とす。建仁三年元服ありて實朝と称しけるを。この君い頼家に従ひ聰明にあり。時政後年の忠を食ふ。後妻牧の方と密謀あり。既に失あらんと謀を設けるを。阿波局女房ありて尼出家に秘ず告。即所へ入る事は或ひ平時の第に入る事なり。是より後元久三年の冬。再謀を実朝に告。彼の事に招請し失なんと做しけるを事顕はして時政い出家し。伊豆の北條へ蟄居なり。牧の方い自殺しぬ。但実朝を実ひて武蔵守朝雅い北條ぶ壻あるを源氏の一族ぶ

によつて四代將軍となり權柄を恣ふせんとする之を慨まども緯文らぎ孫汁發覺する
ふよりて朝雅も誅せらるゝ然るに右軍家の績ひ淺く時政のふ義時とともに執權になる
さきだつ足利外戚の緣に因るゝ更ふ賞罰あきらか如し既に畠山重忠い見より爲
ふ滅亡し舊功の臣ふ於る義盛ともに先達ともを然まび見るの可否をさへ論ふべき
分あるも尼御前義簾中ふ車を計らひ廣元善信上に在て政事を執べよりや義
盛老臣ふりしも。ふ緒士の別業ふて。その任ふあらざるゆゑ妄にはを用ひがたく心中
ふ北條一家の惡逆を憎むのこゝふ於て動もすまび北條が我を權んを爲面前ふ
て義時を摩むるを慶之見より爲重忠。ふて孫戮の刻を始め建久元年冬十一
月義時領知の勇士を撰こ從士し果てゐ軍家の諸士の同席に居らゝ北條家に
奉公さ廿人と既ふ尼御前廣元善信粗をのとに共ーけまど義盛渠が陰孫を
前知一人拒こて止めるまゝ善裁君い頼家の末子ことを嘗中に書いを実朝の

侍を不居らしむ義盛後素の雜車を忍を慶ことを練めけるふ義時驚て其の人
所在ふ問ひ給へども知て人義盛が兄の子を嫁こて妨あるべらべと拒こうしふ尼
御前も粗ものあるを虜ものて善裁と。ふ丹寺公胤僧正ふ茅ふとかりて出家せむ

一説ふいそく見より爲善裁と稱ふ別業所閑梨を曉の未ふと色カの坊ふ
ありをけるを今回管中へ招きの人と云
その餘種こ北條が我を慕ふを摧んと。雜後食にあらべーるを義盛い之理を説
て卿稍狹のことをけまび北條頼ことを。ふて惜こて常に害心を懷ひ。然ふ況義盛
上総の国司を望こ中とありしふ義時拒こて許容せず。その子泰時見を練め義盛
ふどの老功の臣適この望こて果さまび吾一家を怨べー義盛が頼ひい餘義なー。俱
ふ執成て之ふ應せび君ふ対すく忠を竭ー。書家ふも疎云あるべらべ曲て計らひの
れ。と再三練めこるけまど義時偏執の深きふより終ふその望こ空くなるまり義盛

も北條が妨くると悟るゝ。弟にこそと憤ゝ。この折うゝ泉親衡平に係る北條が惡
と憎ゝこそと滅びて濁る世を清うせんと思ひ立て大
将軍と一味の者を多く結ひ義兵を募んと企て。青栗四郎時光が弟阿新
房安然心剛ある法師ゆゑこそとて強食ふ徒しめ同志の者と語らひまるに和
田平太胤長に強き。義盛の男四郎左衛門義直及び六郎
兵衛義重を結ひひろ。この二人が肺肝を汲て同志せしむる人多。とふ由利仲八郎
惟久なるもの一味合体にありながら暴ふ及心をそこのこと千葉介成胤ふ若ぐ成胤
強き惟久とて安然と欺き捕へ拷問まさぐ曽ていそぐ。元より計策をそ由利を
も拷問せ由利苦ふ堪ざる態して盡く首伏せり。同てをまくに対ぶとき向け或
対或ひ捕ふ胤長以下是を多くび欺るまそ搦らる張本親衡を搦めんとそ工藤十
郎助友奉つて集ぐ結伎に考てるふ親衡主従十五人大ふ考ゑと悩て助友を切て

落し親衡を逃り逐電せり。こふ於て和田平太胤長とそ。この陰謀の張本なれと
厳く番兵を附らるとて狩も除堂を探索ふ義盛始め一家の人と大ふ強き胤長及び
義直義重全く疑ふ所なるとて疑ぞるるるれど其輩の思慮もなく犯人をそ荷擔の条其
罪咎うゝざる所なるとゞ曲て厚免の旨沙汰仰ぐと奉て愁訴をけるふ父義
盛ぶ奮功ふ愛て義直義重両人ふ恩免ある べしの命ふ依そ義盛死後の用日と施
し歎ぶふ就て胤長とも言一宥めんとその翌日一族九十八人と引て南庭ふ列ぶ出し。
是とて愁訴なりける胤長ふ今度の張本殊ふ種くの計畧を廻ふ争ふ出許容あるべき。
と其歎願恢ふのこと胤長と面縛をそ一族の前と引渡し。山城判官行村ふ請取
しめ陸奥岩城へ配流せ。ふ是を聞きこと次第あるべ一族寒こと退きけるふ胤長の
宅地在柄ふあり。同て眺近の面々所近きふより是と揚らんとも人の多。然るに義盛一
族なる胤長ふ宅地をとゞ餘人ふ揚らんい妄念のことを在下に揚ひまとの頼ひふ同て旦

義盛に揚ひけまど義盛の荘東久野谷泳
次郎と逐電して行親金窪太郎と共に浮島原潛伏
忠家小分ち與ふ是義時が我家
義盛大小情ずもとしより内に北條一家と滅さんとする企あり。そのとき軍家に
申すべ石大小後き思ひ立て宮内兵衛尉五氏で召使に立らまけるが義盛程く練
術ある武ぶ然もとども相止ず用意頻なりしより。三浦平太郎為継なるもの始八合幹
一方に舊恩と思ひ忽変じて相及へ紅へり。こ小於て孫倉中騒動大ごとあるざり
り義盛も今八國相しと思ひ小ける三族所従三千餘幕府の南門相及の筑西
北と圍むべ是より合戦遠間ず双方の討死数と知ず。朝夫義秀が勇猛力戦
惣門と推破り南庭小入鬼神小斧一働八今猶人に小膾炙せり。かくて義盛兵力
竭きて多紙範が帝従の敗つ矢小中て死也。時小歳六十七一族盡く討死也。で義秀のこ
こを遁と松小とり乗て安房也渡るとぞ。和田合戦の一伍一什然也小委けもどこ小省く

鎮守府將軍良兼
四代
左門尉致經二男
平忠通 村岡小五郎
鎮守府將軍

四代
景長 梶原太郎
景時 梶原平三

景季 梶原源太 左三門尉
景高 平次左三門尉
景茂 三郎兵衛尉
景國 六郎
景宗 七郎
景則 八郎
景連 九郎

人皇八十三代土御門帝正治二年伏誅
今安政三辰迄 六百五十七年ニ成

梶原景時

梶原景時者初屬平軍石橋之役脱
頼朝於丘遂從頼朝眷遇委任之一
谷壇浦軍功稍多奥州之戦近侍幕
府常有虎市之佞果招狐崎之禍

梶原景時幕府に大功ありしの人どもの登庸せ〻ば小殄ゆ已小媚る者
と称し已小怪るのと絶せ積悪の報い一門小ちて梶が滅せ〻ば小
子ども景季以下皆弟させる罪責で焼ざまども父が餘殃遂に所領とのそ

梶原景時の話

景時大庭が陳ふあり。佐殿と逐電して土肥の椙山に潛伏し此処彼処探せど見えざりて。小大なる木の洞あり。若この中あらぬべかりしと景親進まんとする所を。梶原景時先ず進み在下紙を手にとらんと僵木の洞の奥に至り。ちの苔を横へて穴の中を探るとも見ず。ふかくくと蹲まり佐殿破綻するかりひろに梶原い佐と眼眼。ゑりに額をしてと退き大庭ふ對ひてこの中にも更ふ人気もなくれしの大庭いまだ不審をもとどきこれば在下今一面往てゐんと勧せば景時前ふ衝立て這い在下を貫心ある者と思ふとて眼を睨り若この洞ふ入る者あらば在下が對分なりと大刀の柄ふみを挿て猶白眼てありけるとび景親笑つて爭ふ足下が心を疑ふべきにあらず外の峰を探せと軍兵鼓礼しける間ふ頼朝ハとて安房実房を案内として箕根山ふ至るのひそをより実平が計らひあて表鶴が谷より安房ふ至り下総ふ立戻れ程なく運を開るとければ実ふ景

時が裏情を得まじ今まで命活んやと深くこの徳を感じ。ふ於て治承五年。上月十日土肥実平が執達によりて景時を始めて所前ふ召さるゝ。去ぬる日の歓びあるゝ。ゑ。ひ。是より長く君臣の約を固めさせのひろ。かくて景時が言語風容爽ふして一廉の武夫なりと称ひ股肱股心と云ふ。ふ同て武田太郎信義と對面のとき。二浦下河辺佐々木の輩と同席ふ在て若き二を護る婦ふ添を景季他事なく侍りしに使ひ是養和元年四月七日。此頃猪くの浮説多く。四月の上大事なるとび弓箭を把て人ふ勝る心ふ沮ふ寝所ふ相結べーと宣らるゝ其中に景季を撰びへらほかく四懇切なるにより。景時心中に感じ。ふ我宗を振舞ふしゝ人ど雖あて咎むる者なく。若いまだ深く渠がまこと。なるとの善悪とく大ふとなく用ゐるのゐぬとさへなけるとび。景時潔く威を揮ひ。人と人とも思ひ。ぶる。挙動もきりけを逆鱗の遺恨ふ義経と統言ーさーも大功ある

君王堂蔵板

詳正鑑識板

義經を鎌倉中に入らしめず腰越より遂返さしめ、まさに範頼を誡言し、終に自盡せしめ
奇なり。金吾時ゝ佞悪の名中より出でるなり。君ゝ同根連枝たるべし。初のごとく吉頼
ゐ。猶尚の御ゐ思ひ。況てその以下の人々をや。彼ゝ長吉ゐ罷り命を演べ、或ひは君の
勅命を狼ふる。等ふるゐを恐れずや。逆艘の上には弾ゐ傳へて善く人の知ること
の如し。その大罪とこゝゐ綸旨九郎判官義経掠めの人なりと。平家を一谷ゐ追崩
し演面ゐ於て平家の緒ゐ絶るべき人と。多く討ちとりたる。宗盛以下教経
知盛その他の殘兵紅ゐとり奪ひ、讃岐ゐ渡り、さらに九州ゐ到りけ
ま。彼是障ふる人もありそ。まさに讃岐屋島ゐ保り。こゐ於てその中を征し、或ひは
四国を保奉して再び桜井ゐ拠んとせ。義経ことを以て文治元年二月十日院宣
を以て大蔵卿泰経を以て云云の旨奏せしめ。差退作忽なるべ示こと天下の乱と
なるべ今度罷て向ひいて。平家の遺書盡く誅殺せざんば王城へ再び保入いるべ。と

思ひ入て述けまべ。法皇大ゐ御感あ。その義なるべ疾を日ゐ継速に綸旨
を二種の神器奉安ゐ還ゐ返し入べ。と勅定申まべ畏て宿所ゐ保り関東の
武士を集会て演説し、左右なき様ゐ鎌倉へ退くべ。と宣ひけまべ義経
もあるべ何方までも供仕らん。爭て鎌倉へ保るべきことにと決へてゆくべ
べ。その姓名著到を紀さるゐ遠ゐ守義宗を始め。三浦岡崎和田の面々土
肥畠山渋谷熊谷平山佐々木梶原平三景時もその列ゐ於て總軍勢一萬餘騎
とぞ紀さまける

按るに是より為鎌倉の下知として九州の成敗ゐ蒲冠者範頼中ゐの成敗
ゐ土肥次郎実平京都の守護ゐ九郎冠者義経動べ。と命ぜ。まま。それ
ゐ下向なしとゐ。義経ゐ問まべ義経この時ゐ洛ゐ在ゐ。と不快へて。但土肥次郎
実平この軍ゐ従べ。と傳聞の張ゐ。然ま。でも渡辺ゐ於て争端のとき土肥

次郎源太景季で留むるといふ見へハ、其陣に在しなるべし

同十六日義経の軍勢、摂津国渡辺の両所にて舟揃ひをなし、既に纜を解んと
せし時、梶原平三景時進ミ出て申しけるハ、凡そ坂東武者ハ心剛にて、一人万夫に敵
する勇あれども、未だ海戦に精からず、水戦に到てハ中国四国の兵士等ハ常に水
戦を専らとして進退駈引自在を得たり。因て思ふに味方の軍艦逆艪といふ物を
立て進退の自由をなさバ、其利益広大ならんと申て、義経逆艪とハ奈何なる
物ぞと問ふに景時答へて、船の艫舳に艪を立て進むときハ頻に進ミ退く時ハ
頻に退く利方あれバとぞ申しける。義経ハ何ともなく冷笑ひ、大将後方に麾を把
て進めしと下知するとも、敵備強大なるに於てハ退くが慣ひなるに、始めより逃支
度して敵に向ハバ奈何して進むことをなさんや。と申て景時貌を改め、遠ハ理に兵
ども凡そ大将軍の兵を用ふる進むべきハ疾風のごとく退く則も疾きを善とし

其ハ機に臨ミ変に應じて必勝を計るの理なり。只進むことのミ知りて退くべき手備なき
無謀にて進むことを繋しとする者ハ、是を野猪武者といひて拙きことを謂べりと云ぞ。
と義経の顔うち見て席を撲てのたまひけるハ、義経謀て然もあらバ、手并ハいかにも微
しかし義経に於て逆艪と云ひ逃艪と云ふハ好ましからず。只直ちに一向に打蒐て、と宜へバ居並ぶ人々咄と一度に
笑ひけるより景時おのれ赤面をなし、下義経床几を離れ、吾苟くも鎌倉殿の御代
官として三軍に将たり。然るを汝居下の身にて野猪武者と嘲弄せる条奇怪なりと言
ん無禮といひ、其主景時を睨ミ出せし。宜ハ勢も絶ぬに伊勢三郎片岡八郎武
蔵坊等立かゝり、景時を引出さんとしけれバ、景時彼等を礎し白眼、拝宝ハ利害をいふハこそ
軍旅の慣ひなり。然るに恥を与へんとは不忠不義このうへあらんや、その義ならバ対手
になりてんと太刀の欄に手をかけて立あがらんとする時に、義経もまた怒り同く太刀を
抜んとするを、嫡子といひて源太景季、平次景高踊り出、父が後に引副ひ、三浦義澄

後より。まづ義経を抱き留む。畠山ハ梶原を抱き土肥次郎ハ源太を留め。多々良五郎
ハ平次を抱留めたり。條最奇怪なり。今大事を前にあて同士討せんと謂ことあり。軍中に
於て刑害せらるゝハ各忠義あるものゝ所為に互に義を失なハ元平家の悦び鎌倉殿へ申
見て面目なからず。静まり給へと口々を揃へ中に入りて判官も怒りを解て静まり給へバ梶
原父子も静まりぬ。かくて後梶原父子ハ義経にひき別れ長門国に在りける蒲殿に
ぞ参りける。さてこそ是で深く恨む義経を讒しける基とこそハなりにけれ。夫のみ
ならず蒲殿ハ元来温順にて其智量義経に比ぶれバ甚だ劣りたりといへども義仲
を討し平家を滅ぼせしその功浅からざるに因て鎌倉殿も厚く賞し連枝のその一に
居たり。梶原その繁栄を嫉み折あるべしと思ひけるに富士野の巻狩の夜兄曽我の
兄弟工藤祐経を討に及び仮屋尽く騒動し既に鎌倉殿の仮屋へも乱入に及びし
夜以の外にのゝしり風聞ありけれバ鎌倉に残る諸士の面々披露事とぞ出来

群玉堂蔵板

ふけれバ上を下へと騒ぎあひぬ。この時範頼ハ鎌倉の留守居にてありけれバ
是を聞より営中に到て其騒動を静めんとなし。兄頼朝卿若一不慮のことあり
とも範頼かくてあるなれバ後のことハ心易かるべし。各静まれ〳〵と制しけるにより漸くに
営中ハ鎮まりける。梶原景時ハこれを聞き便宜を得たりと心中大に歓びて折
を以て頼朝にこの一言諸士の騒ぎを鎮めんとなすといへども実ハ自立の志あり。更に
御油断あるべからずと讒しければ頼朝ハ例の狐疑深き性なれバ遂に範頼を誅
すべき心を着て紀の人々にいさゝか不審のことさへありしに因て其罪なくして誅し
て自害せしむ。是その紀原梶原が舌頭になるものなり。故に畠山および和田三浦その余の
古老是を察して惜むといへども君ハかけまで常時君の露居なけれバ左右の人皆もあり
成人ことと評してけるぞ。和田畠山三浦及び千葉土肥等の古老における三家の鎌倉
の忠臣ハ然るに景時君に媚連枝を讒し諸士を讒し文治以来諂弄に陥る。或

群玉堂蔵板

公は又殺せさはりの多し然るに多年親しび顔して君の不仁累時が不忠を糾さ
ことをあさまに頼朝薨下頼家の正治元年を十月漸く累時が罪責を糾へ弱冠
を逐ふ到る思ふに不まさ晩うしずやしとの緯理あるふ似へまとあるを人の善悪い
後世の誠鑑ふ宜まる脱ふ 孝謙天皇の田宇弓前道鏡を得て出位とも嗣
んとに是を弱の右りの如く本朝古今比類の 百官百司その威ふ畏はこの
時吉備公大臣ごり考ふまとを日猶ほまを糾さまど 孝謙崩所の後ふ及び道鏡を
もて下野ふる某所ふの別業ふまを。是をその罪を責てなり然まば 天皇在位
の日実為ほまをあさまはや思ふふられも崩所の後道鏡が罪の露まをる累時
はまさ是に類まべ古者の忠臣親しび顔して在しにはあらざるうん
かくて孫会二代ふ軍頼家の時ふ右び正治元年のとなり結城朝光官中ふ在て甚
同僚ふ結ふそのそくまを忠臣ハ二君ふ仕へじと在下不肖なりとのへども古将軍

ふ仕へ拳て殊絶の恩を報ゆいうさまをバ幕下薨逝の時仕へを致し刎殺して
世を遁まんと欲ひしに遺誡を奉りて其の志を果し得ざ今をまを考ふまをバ腑
を噬の悔あり。とのひ日後ふまを双眼より涙を潸然と流し乃梶原累時侍ふ在
てこのまを使と等一羽林頼家ふ繕てのそく朝光先君より恩顧を蒙こる者ふ
ふありふ二君ふ仕へざるの節を汲て往時を慕ひ来時を懐るまを世を孔さんと
をるの職なり早く誅を加へまを後かるまを患へおくんと言しにけまを頼家ふ元
来暗愚なるにより累時が諂を信ず武士に命じて朝光を誅せんと企らはまのを
早くも聞ありて大ふ驚きこ浦ふ義村ゲ第ふ出へ如此このことあるなり在下曾
て裏心あるまを頼くハ朝光が為ふ先来を計りのまを。とのひけまを義村も俱ふ
涙さて像てよう累時が逸ふ涌ふ老をし然まをとも古幕府石橋の役ふ大功あり
て無罪を報ゆるにより舊臣日牧とまを釋せり。開を暁らまを今ふ於て頻りに強

群玉館藏板

言と構へる条。実に怪しき拙なり。君の為国の為、深く慎まざるべからず。と云て畠山次郎重忠、和田左衛門尉義盛を始め、諸老臣ども、共に涙を流す。

実にもと宜めけるに、次及ぶ輩六十六人、同所の廻廊に居あつまりて、景時が過悪を訴へんと欲す。一人、かゝて景時が奮新の罪盟く書して、左に六人、右に六人、景時を今さう陳謝せるに、秩父一族、従類を引倶して、東地なる相模国一宮へ逃のびぬ。

署の面々六十六人、とは、追討せんと欲すれども、前所、臺政の代、四方より集たる罪科ありとて、古幕府義兵を挙げ、加担の一戦の利を失ひ、数の為に義盛の、既に此生害あらんとせし景時、憐れとまぬ。その免急を願ひ、此類あき功なるゆえ、夫より以来、恩遇深しとぞ。

軍忠の浅きあるべき。純中源太景季生田の表に平家を討ことき引かへさどの分に、能く梅花を挿しるて武勇とのび心操の優なる人、多かりとぞ。

幕府も一方あるべきぞ。股肱の臣とも思しめ、ぬ。然るに今度、かりけるき罪あり、とても遠ふ。と云て、追討せるに、思ひ、自分も、と云て悔て。その東地へ退きぬ。此後何ものとて、仕出さん。先生、良の好えの、ばば、義下様と加ふるとも、遅れ、ふ、あらざるべし。と奮功を述て、諸士の怒りを宥めの人も、程あり。そのまゝに止まり。と云、偏に前四郎、四仁、忠に拠りのあると、景時、と云て、知るや、知らずや、一官に奔りて後、一族を集合、綸しての、ち。吾幕府の代時に大功を立てる人の、知る所なり。然るに、薨逝の間もあらざるに、遇て、嫉むの族、連署して、滅さんとて、その結構言語に絶し、既に、月を捨てこの厚を雪めんと、思ひ、かくて、自滅を招くに似たり。まづ、その災を避て、後に何程の全方あらんとの、東地へ退きて、若し、武を、煉て、兵を、蓄へ、不日に、攻上らん中、とその計、義を、破りけるに、甲斐源氏、武田有義、兵湯尉に任じ、武田太郎信義の二男、父信義の盲士川の戦ひ、その功、莫大なりしとぞ。

後河内を領して當時緣會の諸士のうち第一の人なり。五十万石の除を領せり。然るに嫡子一條次郎忠頼とのひけるに人緣數の少なきあるに因て元暦元年當中に天野藤内遠景奉ずと且て緣戚のよしけるその事によりて信義の疎ぶ難所の者とあるを怨みるかとなりしとのべども忠頼の連署なる且び奈何とも術なくて空く月日を送るやうに文治二年年去せり。とふ故て有義の謀叛を企むと遠景高をして密に有義が方へ到らせ這回不慮の災を来せり結らべ異儀あるべしと景高をして密に有義が方へ到らせ這回不慮の災を来せり一官へ引籠り。積弊に堪ざるみどうの分の上に物語ふ也。父信義が罪あるべしとて勢兵あり世ふ為人となりて然とそ会ふ思ふ為に有義の言葉に誘ひ且人が弊情を晴さんと云ふのうち力臣ぜ幸に法涙をるのと忘りて舎こそ物ぐ且び景高今の仕儀しりとその元中に若るに有義の妙なあぐ。その儀虚言なくば無せんと仔細あり望む所くと者且び然いとて勝て近く進まし。同終

教到ふ及びり。終て後余るへ伴て父ふ若けるに景時大ふ歎びく夫より万事有義と。その緣斗と結らふ而勢合して三千ふ過ぎ今活る微勢とりて緣會と繁かとも。更ふ功いあるべうべ加藤景ふ射一弓と宣逆徒とのそなとも怨ちり今將軍家の行ひとるに遊興ふ長ト淫酒と好と更ふ政道と顧ぜ長員編頗のことのこと多く然人とふ委と沾とあり人世の礼とも近きふあり。さとびたのうと奏ぜ。院宣と請て関西諸国の軍兵と聚め一挙ふて光遠の頼家と滅し新羅殿の編流る。有義とれ軍と仰ぎ吾とふ執権とて天下と掌に握て濁りくる世を清うせんと大膳ふも衆綸一次して有義ふ牛領後河の兵と備し景時と倶ふ上洛し院宣と請んと約と定め後河ふ在つて密くに軍兵と集めり景時が左右と候とふ余時ふそのもの平家追討として蒲冠者範頼の際ふ屬し中ふ諸ふ在けるとび極機ある者も少なくべ。さとび院宣とまり請ひ逆ふ中ふ到り四国ふ

敵えんべ。五七方の勢を引んい。案の中にと雪ふ。密ふ准備して一族を引倶し一宮を
こち立て。援河の国を至りけるに。かくて同国清見が関と遊る所ふ近藤の土葦原八
郎工藤と郎。三澤小次郎仮田五郎等。ふ外様の者ふ。梶原ごとて。縁
て日猶とあり。うう快しとうち敷ぶかくて。或日この四個ち矢推ち元従者ども。きつと
猟ごせんとこち立て。物まぎ死ち。彼方此方ち巡るに。端なくも梶ふ父子先ふ立従
者ともふ四五十人。物具ハせざ且ども。要あり気に道を急ぐ。葦原前ふ塞きて。孫ら
しや景時ぬし。この頃ハ鎌倉ふ遊きて在所ふ。ふ人の者ふ。何用あり
て一族ふ倶し。何方まぢゆきぞ。この所ハ吾ふ領知ふて案内ふ。ふちとせう
ふ条。ふ汚ぶくしと結つけ且ば景時ハ頑腹しのふもこの頃仔細ふつて。鎌倉ふ
あるまぢ来地ふ一宮ふ在住せり。然るにさて要の事ありそと且ふ来ぬとそと通
るとしや足下ふ領知ふりとも。元と且ふの海道ふ何ぞ事無に案内とすべき由ふ元

と答ふる人ふ。其処除きんへとのひも敢ば。後方ふ立る景季以下。景高ふも睨眼
して。馬と早め走らんとに。葦原及び四個の者ふ。怪しとぬりひけ且ば。まとその先ふ
衝ちち。道と塞ぎて大青あげ。元と者の気色と被ふり。熟ふる者ハ刀を怒ふ
ふて。者と敢ふる所以ふ。夫者のとハ者ふとハ。雑へ者ふぬとハ。然るとかく一族従
類墨と排つて。安ら馬ハかのくば野心とふるハ。俳月ふ者ふ然ふもあらば。国家の凶為
主ふハやとう通さじと。弓ふ矢挟ふて射らんとも。景時ふ由なき奴ふ見咎め
らふ。一念ふ。蹴倒して。仕んとハのと易き事ふ。仕ふ且ども。かくてハ後月の妨あり。
縣しとて通らんと。実ハ彼軍家の気色と被ふり。乗地ふ且ども。這ハ全く。縁
者の所為ふ。その罪ふ。さ且ば言ふ。彼ふ且ども。その情上ふ通ぜず。ふて
於て。熟田の社へ祈願の為参詣せん。一族と倶して。乗ふ公ふ宜くふ通して。吾志
願と果させよ。しのひくまとも走らんとに。その言ふ。烈なる且ば。事で人を縣

もとより。吾くと欺き得んを。適もなしと奏うけて。四個矛一矢。とうち番ひ。きりくと
寵絞る。後方にあり。景季景高大小怒りてその義なり。潔敢て通らん。と太刀抜
翳して。さち射ふ。雑人ども。左右小別を。得物を引提雲時ぐるどい。挑こうしが
景時。いつゆもを切拔んと。ろくろく心脳して。畏りがくそひけるを。捨鞭をあて池
出を。ゆでゆ息所従も。踊ふつぎ。一数小蒐出を。嫌あり。返せと芦原三藤三沢飯田い
士卒を励ま。揉小揉で。逐近ろう。既小同じ狐ぐ待とい。所ゆそまで池著き。数く
小射ちくまを。梶原心い剛ゆを。どゆを。素肌とのひ。食戦の用意なけるを。数しがく。
各深傷を負ぬるを。今いたや見すぐ。と景時を。始め景季京高。景茂及び戦死
する者。幾て二十三人なり。ぬる侍ちの父子英雄ゆて。才智衆小抽くを。ごに古をとりて人
を。偏るその報い絶小遠を。実小惜むべきことゆくずや

日本百將傳一夕話卷之七終